

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

香川県高松市

学校名

高松市立前田小学校

学校のURL

<http://www.edu-tens.net/syoHP/maedaHP/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】8学級 【特別支援学級】2学級 【合計】10学級

児童生徒数

【全児童数】236人（平成23年12月5日現在）
（内訳：1年生33人、2年生39人、3年生47人、4年生29人、5年生42人、6年生46人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「豊かな心を持ち、たくましく生きる子どもの育成」

【人権教育に関する目標】

子どもの姿に深く学び、保護者・地域・教師が一体となって取り組む人権・同和教育

人権教育にかかる取組の全体概要

1 人権教育推進の方向

本校が進める人権教育の柱となるものは、児童理解を深め、保護者や地域と連携して、個々の実態や課題に応じた目標を設定して指導と支援を行うことで、一人ひとりの児童の自立を促し、将来にわたって生きる力を培うことである。

しかし、少々の失敗で投げ出したり、努力することを面倒くさがったり、「自分はどうせできないのだ。」と最初からあきらめたりと、向上心が薄くその場の興味や関心に左右される児童が多くいるのも実情である。また、相手を思いやり優しく接することができる児童は、同時に自分を大切にし、自信をもって行動できるという傾向が見られる。そこで、本校では人権教育を進めていく上で自尊感情を高めることに視点を当てて研究と実践に取り組んできた。その中でも学力の向上は、日常生活で「やればできる。」という自己実現に最も結びつくものである。同時に、ともに学ぶなかまの存在感や学習集団としての連帯感の育成につながるものでもある。以下この自尊感情を高めることを中心に述べたいと思う。

2 学校で自尊感情を高める

学校で自尊感情を高め、学力の向上を図るためのベースになるものは、個を支える体制である。家庭や地域との連携・教師間の連携が大切であることは言うまでもない。このような体制が整った上に、自分との関わり、友だちとの関わり、集団との関わりの中で、「自分のよさ」「友だちのよさ」「集団のよさ」という3つのよさに気づかせることが必要である。たとえば、児童が学校生活や日々の暮らしの中で、がんばって何か願いを実現させたという体験をしたとき、その体験から自身の成長を自覚できれば、自分を高めることの喜びやすばらしさを実感できる。また、友だちと関わる中で、友だちのよさを知り、自分との違いを認めることで、お互いの存在を尊重できるようになる。他者を認め、尊重できれば自分自身を大切にできる。さらに、友だちや学校集団の中で役割を果たして達成感を感じたり、感謝されたりする経験を重ねることで、自分は必要とされる存在であることが実感できるようになる。このように、「自分のよさ」「友だちのよさ」「集団のよさ」という3つのよさに気づかせることで、児童は「自己肯定感」や「自己有用感」を感じられるようになり、「自尊感情」が高まることになるのではないだろうか。そして、このことは学習意欲の向上につながり、ひいては本校の学校教育目標とするところの「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成」の実現につながると考える。

3 学習を通して自尊感情を高める

本校では、授業や活動を通して『自分もわかる・できる・がんばれる』という「有能感」や『自分で決められる』という「自己決定感」、『友だちや先生が認めてくれる・感謝してくれる』という「他者受容感」、これら3つのエモーションを感じさせることができれば、児童は「自己肯定感」や「自己有用感」を実感し、自尊感情が高まると考えた。その際、大切にしたいのは言語活動である。なぜなら、感じたことをより確かなものとして自分自身にフィードバックさせる（気づきを実感に変える）ためには言葉を媒体として児童自身が表現することが効果的であり、さらに、感情を言語化させることで児童にセルフコントロールする力を身に付けさせることができると考えたからである。また、授業は人間が相互に働きかけ合う相互作用の過程であり、子どもたちはこの相互作用を通して対人的な技能を発達させることを学び、自分の自尊感情を生み出し、高めていくことができるのではないだろうかと考えた。これらのことから、授業においてこの相互作用が実現するためにも、言語活動は欠かせないものなのである。

4 研究の内容

研究の重点課題

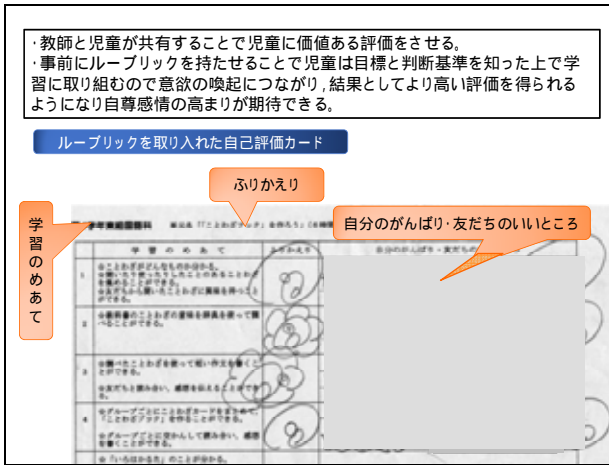
【重点課題1】言語活動を通して、自尊感情を高める学習指導を研究する

【重点課題2】自尊感情を高めるための活動や教師の支援体制・家庭や地域との連携の在り方を研究する

3. 特色ある実践事例の内容

重点課題1「言語活動を通して、自尊感情を高める学習指導」に関する取組

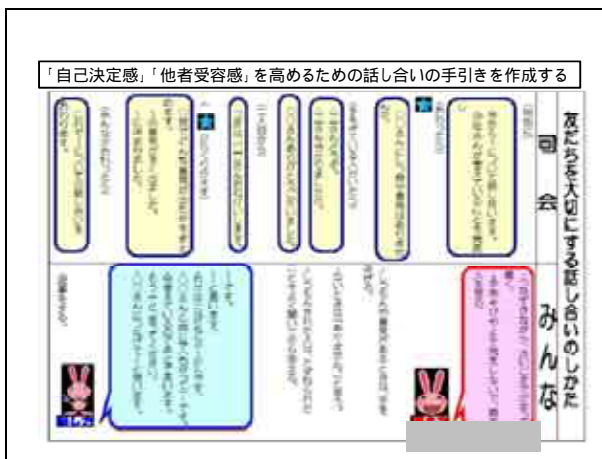
(1) 3つのエモーションを位置づけた指導計画とルーブリック



本校では、高めたい3つのエモーションを指導案の中の指導過程に位置づけ、重点的に指導に取り組んでいる。また、個々の児童の自分への評価が高まるような手だてとして、自己評価や他者評価の観点や方法を工夫したルーブリックを取り入れた。ルーブリックとは、児童の行動つまりパフォーマンスを大切にした自己評価である。児童は目標と判断基準を知った上

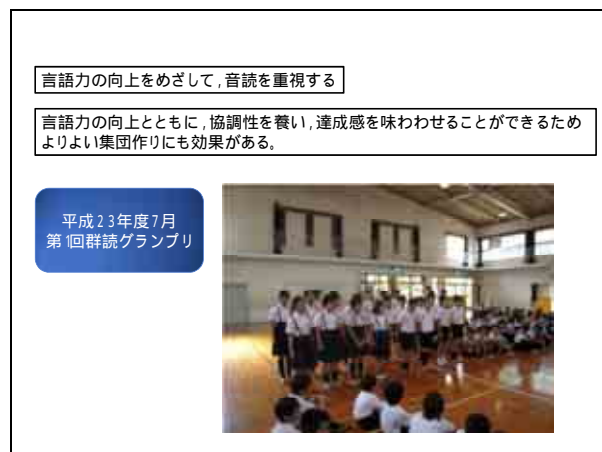
で学習に取り組むようになるので意欲の喚起につながり、結果としてより高い評価が得られて児童の自尊感情の高まりが期待できるようになる。

(2) 友だちを大切にする話し合いの手引



本校では、授業の中で「友だちの話をしっかり聞くこと」「友だちの考えを聞いて自分の考えを深めたり広げたりすること」を大切に学習活動を取り入れていくことで「自己決定感」と「他者受容感」を高めたいと考えた。そこで、「友だちを大切にする話し合いの手引き」を作成し、全校児童が一人一枚ずつ持ち活用している。

(3) 5分間音読と群読



本校では、児童の言語力の向上のために、音読を大切にしている。全校児童が1冊ずつ詩集を持ち、国語の時間に5分間の音読を行うとともに、その発表会として「群読グランプリ」を年間2回開催している。協調性を養い、達成感を味わわせることができるため、よりよい集団づくりにも効果が表れている。

(4) プラスのモデリングを促す児童相互の言葉がけ

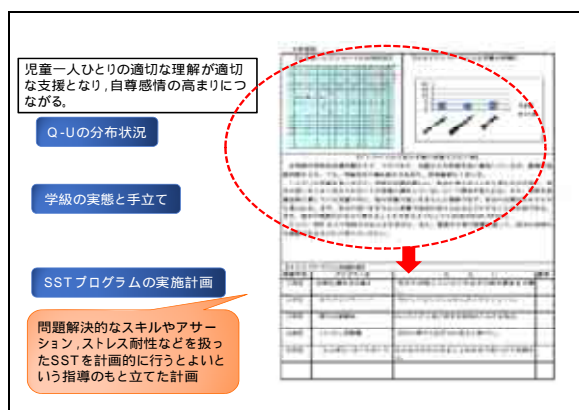


児童にとって、学校における身近な評価者としての教師や友だちからの言葉がけというものは非常に大きな影響力をもっていると考えられる。そこで、昨年度の授業実践の中から3つのエモーションを高めるために効果的であった教師の言葉がけを4つの類型に分類して活用している。さらに本年度は、ソーシャルスキルトレーニング(以下 SST)の1つ

として、全校児童が「友だちにかけてもらうとうれしい言葉」を考えた。そこで考えられた言葉は脱靴場に掲示し、意識の向上を図っている。

重点課題2「自尊感情を高めるための活動や教師の支援体制」に関する取組

(1) 学級集団の傾向を把握するためのアンケートとSST



児童一人ひとりの適切な理解が適切な支援になり、ひいては自尊感情の高まりにつながると考え、昨年度から教師の日常観察に加え学級集団の傾向を把握するためのアンケートとそれをもとにしたSSTを取り入れている。5月と10月に学級集団の傾向を把握するためのアンケートを行い、その結果をもとにクラスごと

にSSTの実践計画を立て取り組む。本年度は香川大学准教授宮前義和先生のご指導をいただきながら、学級集団の傾向を把握するためのアンケートと教師の観察結果をもとに、各担任がSSTの計画・実践に取り組んだ。

(2) 地域や教師間の連携・児童理解



本校では、児童一人ひとりの支援を的確に行うために、生徒指導委員会を定期的に行っている。その際、専門的な立場でアドバイスをいただけるよう宮前義和先生をお招きしての研修を行った。また、校区の児童養護施設「讃岐学園」の先生方にも参加いただいた。このように、生徒指導担当教員を中心に校内は

もとより、讃岐学園との情報交換を密に行い、連携の強化を図っている。

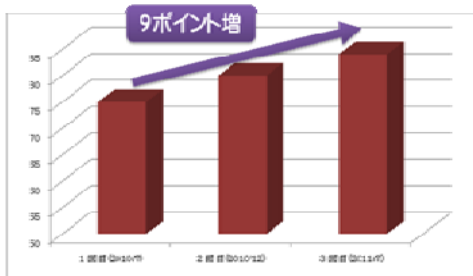
4. 実践事例の実績、実施による効果

研究を振り返って

(1) 「有能感」について

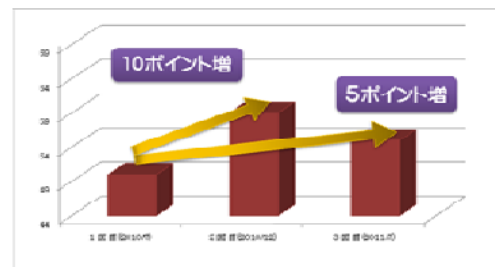
資料1より、「有能感」の伸びは顕著であることがわかる。これは、主に【重点課題1】の実践の成果であると考えられる。また学校評価で、国語の県版テストで8割以上得点できた児童数の伸びや(資料2)保護者へのアンケートで「子どもに基礎的な学力が身に付いてきている」と肯定的にとらえている保護者が2009年度より8ポイント増えていること、さらに「子どもは家庭学習に進んで取り組んでいる」ことに関して肯定的な回答をした保護者が2009年度より24ポイント増えていることもこの結果を裏付けるものと推測できる。「有能感」を高めることで、家庭学習に進んで取り組むようになり、それが学力の定着に結びつくという相乗効果が期待できる。

【学習を通して、自分はやったからと自信が持てる】に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた児童の割合の推移



【資料1 「有能感」に関する児童アンケート】

【国語の県版テストで平均80%以上の者の割合】

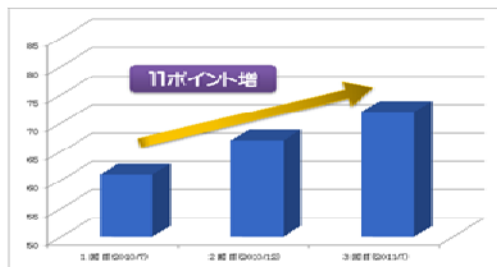


【資料2 学力に関する学校評価】

(2) 「自己決定感」及び「他者受容感」について

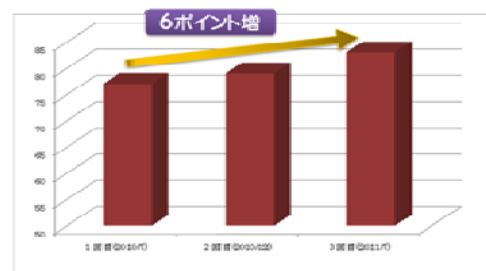
資料3, 4より、「自己決定感」や「他者受容感」が高まったことがわかる。授業の中で「友だちの話をしっかり聞くこと」「友だちの考えを聞いて自分の考えを深めたり広げたりすること」を大切にした学習活動に全校で取り組んできた結果だと考えられる。さらに、プラスのモデリングを促す教師や児童相互の言葉かけや、【重点課題2】で個への関わりを大切にしてきたことも「自己決定感」「他者受容感」の高まりに多大な影響があったと考える。

【自分の理由をしっかりと述べて学習に取り組んでいる】に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた児童の割合の推移



【資料3 「自己決定感」に関する児童アンケート】

【先生や友だちに認められ活やくてきているのうれしい】に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた児童の割合の推移



【資料4 「他者受容感」に関する児童アンケート】

5. 実践事例についての評価

今後の課題と方向

前述のような評価・反省にたち、今後も以下のように研究の実践を推進していきたい。

- ・ 児童一人ひとりの共感的理解がより深まるような児童理解の手法を学ぶ。
- ・ 自分の思いや考えをきちんと伝えられる言語力を育てる。
- ・ 少人数指導体制や個別指導等により基礎学力の徹底を図る。
- ・ 教師自身の人権感覚をさらに磨く。
- ・ 家庭や地域、関係機関との連携をさらに深める。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

高松市立前田小学校

学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが効果的に進められている実践事例である。

人権教育を進めていく上で、自尊感情を高めることに視点を当てて研究を進めていくという方向性が明確であり、教職員の共通理解もできていることが、学校総体としての取組につながっている。

自尊感情を高めるために、気づかせたい3つの視点を示して、具体的な取組を進めていることは、教職員の意識改革につながっている。具体的な取組についても、ねらいと方向性がはっきりしていて、他の学校への波及効果もある。

特に、「ループリックを取り入れた自己評価カード」「話し合いの手引き」等の活用での成果には期待ができる。